

イヒタテンジンシヤ 飯田天神社 珠洲郡

飯田に鎮座して、今春日神社と稱して居る。承應書寫の式内等舊社記に、『飯田天神社。飯田郷飯田村鎮座。稱『渡唐天神』とあるが、貞享の書上には、『飯田春日大明神、縁起無之故其初知不申候。弘長元年に平朝臣柱原伊勢守と申者致再興。』とあつて、もう春日社になつて居る。

イヒタハンザエモン 飯田半左衛門 四百

石を領し、御馬廻組に班し、正徳四年歿。子孫世々藩に仕へた。

イヒダヤガマ 飯田屋蓋 ↓ミヤモトヤガマ 宮本屋蓋。

イヒダヤハチロエモン 飯田屋八郎右衛門

八郎ともいふ。宮本屋蓋に従事した陶工で、大聖寺の人。青色系の彩釉を避け、自家の工夫による赤色顔料に金彩を加へて、精細なる著書を施した。世に之を八郎の赤繪錦調手又は八郎手とも稱した。嘉永五年七月十四日四十八歳を以て歿。

イヒタリホウ 飯田季峰 新七と稱し、尾

張の人。靜庵又は季峰と號して南宗文人畫を善く描いた。明治初年頃から十二年まで珠洲郡小木に來住して居た。

イヒツカ 飯塚 珠洲郡正院郷に屬する部

落。元祿十四年の郷村名義抄に、『此所に飯塚と申塚有之に付、村名に罷成申傳候。』とある。

イヒヌマスケザエモン 飯沼助左衛門 慶

安元年前田利常に召出されて、俸百五十石・御異風料三十石を賜はり、御鐵炮藥合御用を命ぜられ、元祿四年歿。子孫世々藩に仕へた。

イヒノヤマ 飯山 ヤマ 羽咋郡邑知院に屬

する部落で、藩政時代の宿驛であつた。能登名跡志に、『家數九十軒許。爰に飯山川あり。源は越中水見の庄輪田村越より流れて、羽咋の濁へ入る也。』とある。又元祿十四年の郷村名義抄に、村名は古昔山犬が多く居たから、犬山と稱したものと轉訛であるといふが信じられぬ。前田利家の初めて能登に入つた時飯山に居たが、その地に良井水を得なかつたのでやがて菅原に移つたと傳へるが、その飯山の館といふものは、古老紀談に飯山から四町許西で大惠寺といふ寺屋敷であるとし、大惠寺は又大護寺とも大宮寺とも傳へるが、要するに千代町領である。

イヒノヤマガハ 飯山川 イノヤマ 羽咋郡

菅池のゴヨマツ山に發し、同じく菅池のモジナオー山に發する田代川、菅池の後谷に發する女殺川、神子原の獵木谷に發する日詰川、神子原の石神山に發する白瀬川を併せ、飯山に至つて邑知川を分派し、本流は菱分に至つて邑知灣に注ぐ。流程十二程。その分流邑知川は千代町にて更に二流に分かれ、一を四町川といひ、吉崎に至つて邑知灣に入り、他を垣内山川と呼び、千田に於いて亦邑知灣に入る。

イヒノヤマシンメイグウ 飯山神明宮

イノヤマ 羽咋郡飯山に鎮座する。貞享の由緒に、『其初不知、氏子共寄進に而御正体一枚、慶長二年之年號に而御神前に有之。』と見え、又能登誌には、『氏神飯山明神は山手に社ありて、毎歲八月十四日祭禮にて町中神幸あり。此神体は濁に住みし蛇身を祭りし神なり。』と記する。

イヒムロ 飯室 羽咋郡富木院に屬する部

落。

イヒライチノジヨウ 飯尾市丞 養父九郎

左衛門は豊臣秀頼に仕へて千五百石を食み、慶長十七年歿した。市丞は大坂落城の後元和三年金澤に來り、同六年に姉婿長沼左馬進が死んで、忬外記が幼少であつたから、遺知千三百石の中五百石を賜はつて、その代番を勤めて居た。後外記の成長するに及んで之を返還し、市丞は牢人になつたが、寛永十一年前田光高に召出されて、天和三年に死んだ。子孫世々藩に仕へる。

イヒラソウキ 飯尾宗祇 三條西實隆公記

を見るに、宗祇は文明十年三月、越路に下つて、翌年十一月歸洛し、長享二年五月越後に向かひ、十月上洛したなどいふから、その往返の途必ず加賀を過ぎたことであらう。さればこそ宗祇の著書良葉に、『加賀國山川三河守許の會に氷室を、みこしぢやみやこぢかくはひむろ山。おなじ心を、水さむき山をひむろの名殘かな。』など見えるのである。しかし津田鳳卿の石川訪古遊記に山河三河守館迹のことを述べて、『參河守嘗招種玉老人宗祇于其第。共賞『芙蓉』唱和。事見『飯尾宗祇宇良葉集』。風流遺韻馨人齒牙。』と記するが、この連の句は現存の宇良葉に見えぬ。又寛文八年板津檢校が白山宮に奉納した法業百韻獨吟連歌序中に、宗祇の句として『天照す神のは、そのみ山哉』を掲げ、元祿五年句空の著した梓原集にも、『天照す神のは、そのみ山かな。これは傳聞、宗祇翁白山禪頂の時、峰のは、そによそへて、峰の伊弉冉尊たることを明かされるにや。』と記し、同じ頃の加能越金砂子には、『賀びを加ふる國の白き山、宗祇』と載せ、享保元年石川郡宮ノ腰に近き大野渡神社の神主河崎英之の書いた信田屏風記に、『當社につたふる宗祇法師の句に、旅人のみやのこしけんおそざくら。』としてゐるが、それらが實際宗祇の句であるか否かは明らかでない。能登に於いても、櫻炭にある長久の句の端書に、『二宮を打過高島といふ所にいたりぬ。誠やこゝはいにしへ宗祇法師の薪にまじる花の枝と詠せられしを思へば』といひ、能登誌にはその句を『たかばたけとてもたかるるさくらかな』として傳へてゐる。

イフウ 異風 御異風は鐵炮の修練を專とする平士で、組を作つてゐた。國事昌披問答に、寛永七年初めて二十人召出され、知行百三十石充下され、高岡に置かれたとある。その姓名は詳かでないが、十九年に武藤加兵衛等の名が見え、此の時既に三十石の異風料を賜はつてゐる。寛文年間に至つては篠嶋少右衛門等二十九人の名が明らかである。列位は組外の上であつたのを、元祿十六年二月からその下列に定められた。後享保十九年から異風料三十石は藝術修練の上で興へられることになつた。

イフウコガシラ 異風小頭 御異風小頭は

御異風中から撰任せられた。慶安二年井上勘七が命ぜられ、役料五十石を興へられたのが起原であらう。寛文七年渡瀬彦右衛門之に任ぜられ、十二年井上死し、翌年小塚彌兵衛が命ぜられた。其の後一旦中絶したが、享保九年九月二十七日不破傳七・飯沼忠兵衛が命ぜられ、役料五十石充を賜はり、この後一人役となつた。

イフウザイギヨ 異風裁許 御異風裁許は

...

イヒ—イフ